第 2 章　ツアーからツーリズムへ

少し先を急ぎ過ぎた。話を 18 世紀の半ばに戻そう。1750 年代までの観光旅行者は、裕福な知的エリート層に限られていた。グランドツアーはそれをかなりの程度物見遊山的な旅行にまで広げていった。ピアーズ・ブレンドン「トマス・クック物語」によれば、貴族子弟に古典主義時代の国々を実体験させる目的で始まったグランドツアーも、1750 年頃にはプレジャーの洗練された形態へと変質し、英国紳士たらんとする者の大陸物見遊山となっていた。もはや大陸へのツアーはごく限られた学者・文化人らだけの行動ではなく、ホレース・ウォルポール（1717~97）の推計によると、1763 年のパリ条約（七年戦争の平和条約）締結後の 2 年間に、カレー港経由だけで 4 万人の英国人がフランスへ渡ったという。また、J.ブラックの The British and the grand tour (1985)によれば、1738 年にさる新聞が「英国人の海の向こうへ行きたがりは疫病さながらである」と書いている。

学問研究でも巡礼でもなく、まして用務でもない旅行に、金持ちとはいえ普通の人がこれほど無為の旅行をするのは歴史始まって以来のことである。このような周遊型のツアーを行う人たちを「ツーリスト」と呼ぶようになるのが 18 世紀の末頃である。ここまでくれば「ツーリズム」という単語が派生するのも時間の問題であろうが、現時点で発見されている最古の使用例は、1811 年のスポーティング・マガジン（1792～1870、最初のスポーツ専門月刊誌）のものである。他方、今日のヨーロッパで周遊型観光以上に普遍化した滞在型観光も、温泉滞在と海浜滞在という形で 1750 年代に始まっているから、言葉で概念化はされていなかったにせよ、今日から見てツーリズムと呼ばれてもおかしくない社会的な現象となっていたといえよう。

ただし、温泉滞在や海岸滞在は周遊ではないので、ツアーないしツーリズムとは考えられていなかった。この種の滞在までがツーリズムの範疇に入ってくるのは、20 世紀前半に国際観光統計を作成する上で、「ツーリズム」の定義が行われて以降のことである。現在でも滞在型観光は英語ではヴァケーションないしホリデー、フランス語ではヴァカンスないしセジュールであって、ツアーという言葉は使用されていないことを付け加えておこう。

18 世紀半ばの観光維新

私は 1750 年頃にツーリズムが始まったと書いた。ボアイエはツーリズムの始まりをモンテーニュの 16 世紀末頃と見て、1750 年代に観光維新が起きたという。言わんとするところは多分同じである。

イギリス人によって新しい旅が始まっていた 18 世紀の半ば頃、大陸でも斬新な旅が始まろうとしていた。それは自然を対象とする観光である。われわれ日本人には理解しがたいことだが、18 世紀以前のヨーロッパでは、《自然》と《観光》は全く結びついていなかった。旧約聖書の『天地創造』によれば、神は人間の男女を創られたあと「生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物全てを支配せよ」と言われ

た。言い換えれば、自然は人間が克服し支配すべき対象であるから、人間の手が加わっていない野生のままの自然は神から最も遠く、美しくも神聖でもあり得ず、恐ろしい場所でしかなかった。18 世紀以前の西洋絵画に自然美を描いたものは無く、観光旅行の対象は人間が創造した文化的遺産に限られていた。旅人が辿る道は、人間が木を切り倒し、手を加え、歩けるようにした道だけであり、自然を相手に生活する地元住民以外に未知の自然界に分け入る人はいなかった。この価値観が逆転しない限り、自然を観光の対象とすることはできない。数多の旅行記はすべて人の作った都市から都市へ、文化から文化への旅であり、途中の田舎や山中の峠道は、越えていくべき障害ないし道程に過ぎず、そこから遠望する山岳の美について言及した旅行記さえ皆無に近かった。先述した 14 世紀のペトラルカのヴァントゥ山頂への登攀は記録に残された唯一の例外であり、山中に住む木こりでさえ、生涯に一度だけ頂上へ挑戦して恐ろしい目にあい、それゆえに必死でペトラルカの登頂を止めようとしたのだった。

18 世紀にその価値観の転換が起こり、近代ヨーロッパが明確な姿を現してくるのだが、このことが必然的に観光旅行に大きな進展をもたらすのである。自然観光の誕生は、グランドツアーや温泉滞在の誕生以上に大きな転換であった。ゆえに、ここで価値観の転換をもたらした時代背景を概観しておこう。

啓蒙の世紀　「なんという対照、なんという激変であろう。位階制、規律、権威が保証する秩序、生活を固く律するドグマ ― 17 世紀の人々はこういうものを愛していた。しかし、そのすぐ後に続く 18 世紀の人々は、ほかならぬこの束縛と権威とドグマを蛇蝎のごとく嫌ったのだ。17 世紀人はキリスト教徒だったが、18 世紀人は反キリスト教徒だった。17 世紀人は神の法を信じていたが、18 世紀人は自然法を信じた。17 世紀人は不平等な階級に分かれた社会でのうのうと暮らしていたが、18 世紀人はただひたすらに平等を夢見た。」

これはポール・アザール「ヨーロッパ精神の危機」の序文に書かれている言葉である。ヨーロッパ人は、彼らの 18 世紀について、われわれ日本人が明治維新期にもつ「近代化を実現した時代＝文明開化」という意識をもっている。17 世紀末まで、人々はまだ常に「神よ、疫病と飢饉と戦乱からわれらを救いたまえ」と祈っていた。それほどまでに飢饉と疫病が頻発し、死神が怖れられ、人々は神に祈るしかなすすべを知らなかった。社会の発展は人口増が一つの指標になるが、たとえばフランスでは 13 世紀末から 17 世紀末までの 4 世紀の間、途中に波はあるものの総人口はほとんど変わっていない。ヨーロッパが死神から開放され、規則的な人口増が記録されるようになるのは 1740 年代以降である。（ビジュアル p 47）。農業生産の増大と穀物流通の円滑化が進んだことによって深刻な飢饉が克服され、飢饉に随伴していた疫病の脅威も薄れていく。物質的に豊かになることは、心の持ち方や思想の変化などの精神面の変化をも伴っていた。それゆえに 18 世紀は啓蒙の時代とも呼ばれることになる。日本語で啓蒙と訳される言葉は英語では Enlightenment、仏語では Lumière で、暗い闇に光が当てられ、明るい未来を展望しうる時代であることを意味している。具体的には何よりも知識の大衆化である。英語、フランス語、ドイツ語などの俗語

が国語として確立され、科学技術の解説書や文学や旅行記など、現世への実用と娯楽に役立つ書物が増え、人々のキリスト教離れが始まる。

また、ルネサンスに始まったギリシャ・ローマ文化を金科玉条とする古典主義の思想に疑問を投げかける「古代人・近代人論争（新旧論争ともいう）」も起こっている。直接のきっかけは、詩人でありフランス・アカデミー会員でもあったシャルル・ペロー（童話作家として知られる、1628~1703）が、1687 年 1 月 27 日、アカデミーの会合で国王ルイ 14 世の病気回復を祝う『ルイ大王の世紀』という詩を朗読し、「ルイ大王の世紀はアウグストゥスの世紀に比肩しうる」と称えたことであった。これに古典主義の擁護者ボアロー（1636~1711）が古人の優越を冒涜するものとして激烈な反論を行い、ペローが再反論する形で多くの文人たちを巻き込んでいった。ペローらは学問や芸術のさまざまな分野において近代の優越性を説いたが、中でも注目すべき点は、「近年の自然科学の発展が古代のあらゆる科学を凌駕し一新した」と主張したことである。17 世紀のガリレオやニュートンの研究が思想界に衝撃を与え、18 世紀になると「人類は自然科学の発達を基礎に、未来に向かって無限に進歩する」という思想が現れてきた。楽園を追放されて堕落の道を歩み、終末を待つという思想とは真逆の発想である。

知識の大衆化、現世への関心の増大、人間の進歩という観念…。そうした時代の潮流から生じた啓蒙思想は、現実社会の不合理を認識し、一層の進歩のためには社会の不合理の是正に向かわなければならないという方向性を生む。イギリスではすでにピューリタン革命と名誉革命によって絶対王政が否定され、近代市民社会の政治原理が明示されていたのに対し、フランスではまだ絶対王政下の「旧体制」が続き、社会の矛盾が膨張してきていた。フランスに興った啓蒙思想とは、17 世紀において強化されたキリスト教信仰と王権神授説による絶対王権主義をともに批判する思想運動であった。その運動の偉大なる成果が百科全書であり、運動の急先鋒が百科全書派と言われる人々であった。

百科全書　啓蒙主義運動の成果でもあり推進力でもあったのが百科全書の刊行であった。反知性的なキリスト教の教えに挑戦する「理神論」が、根底からキリスト教信仰の在り方を揺すぶった。理神論は、世界の創造主としての神は肯定するが、創造されたあとの世界にもはや神は関与せず、自然の法則に従って人間が決めるべきものという思想である。そうであるとすれば、神の審判による死後の魂の救済をではなく、現世の幸福の実現が追求されるべきことになる。その思想を目に見える形で示したのが啓蒙思想家ディドロとダランベールの共同監修による百科全書の刊行であった。モンテスキュー、チュルゴー、ヴォルテールをはじめ、当代最高の知性とされる 184 人の執筆者を動員し、1751 年の第 1 巻の発刊以来 21 年の年月をかけて、森羅万象を解説する大事典が刊行された。第 2 巻刊行後カトリック教会と高等法院はこれを不敬神の書として糾弾し、一度は刊行を認めた王権が出版許可を取消したため継続が難航したが、読者の支持や政府内部の同調者の密かな支援によって、ようやく本文 17 巻、図版 11 巻という知識の体系を完成させたのであった。

ついに、キリスト教の自然観とは異なる自然がはっきりと現れてきた。科学を重視し、現世の在り方を問題とする 18 世紀の啓蒙主義者の闘いは、旧制度（アンシャン・レジーム）下の社会矛盾を暴き、最終的に王権を暴力的に打倒するフランス革命にまで行きつく。フランス革命は自由、平等、博愛という普遍の価値を打ち立てる政治革命であった。そして同じころ、イギリスでは技術革新にもとづく産業革命が進展しつつあった。

18 世紀半ばに上昇気流に乗った観光は、近代を生み出す二つの革命をはさんで、大発展を遂げることになるのだが、その第一の成果が自然観光の始まりであった。

ジャン・ジャック・ルソーと自然観光

では、ヨーロッパ人はいつ、どのようにして自然を美しいと感じ、鑑賞するようになったのか。史書も文学書も、「自ら自然の中で育ち、自然に親しんだジャン・ジャック・ルソー（1712~78）によってである」ことに異論はない。フランスの語学辞典ラルースの初版 1875 年）は次にように書いている。

> 馬車と川船の時代に、旅行者はいても、ツーリストはほとんどいなかった。…容易に使える交通手段がないにもかかわらず、18 世紀に J.J.ルソーという最初のツーリストを見出すことができた。彼はスイスとイタリアを徒歩で、背嚢を背負い、杖をつき、黒パンと牛乳とさくらんぼだけで飢えをしのぎながら、スイスからイタリアまでの長旅をしてのけた真に自然の子であった。

ルソーは意図的に自然を楽しむために徒歩で旅をした最初の人である。少なくとも本人はそう言っており、ラルースは、明確に自然観光とルソーを結びつけると同時に、自然を楽しむ旅と徒歩旅行とを同一視した（ボアイエ p 77）。ルソーはレマン湖西端のジュネ―ヴで生まれ、13 歳にして家族を失い、ヴァラン男爵夫人の庇護を受け、多感な 16 歳から 8 年間をシャンベリー付近の彼女のシャルメット山荘で過ごす。その間あらゆるジャンルの学問を独学する一方で、豊かな自然の中を歩き回り、植物採集に熱中した。鋭敏な感受性を心ゆくまで自然に向けた結果が、彼の文学や思想に大きな影響を及ぼしたのは明らかである。彼の小説「新エロイーズ」（1761 年）は、都市と都市文化にしか興味を持たなかったそれ以前のヨーロッパ人を、劇的に田舎や自然豊かな環境に誘い込んだのであった。

小説の舞台は、前（プレ）アルプスの山岳美と湖水美豊かなスイスのレマン湖の周辺であり、湖の北東岸ヴヴェイに住むデタンジュ男爵の娘ジュリーとその家庭教師サン=プルーとの恋物語である。ジュリーが心ならずも結婚したロシアの貴族の領地であった小村クララン（今日のモントルー郊外）と対岸の小集落メイユリーなどが二人の愛の物語の中でロマンチックなイメージ（湖上で風浪に逢い死の危険を逃れた後、上陸しサンプル―が愛を告白する）をもって語られる。「新エロイーズ」はヨーロッパ諸国で 18 世紀最大のベストセラーとなり、大勢の旅行者が「新エロイーズ」ゆかりの地を求めて《ルソーのスイス》を訪れるようになった。

ちなみに、「新エロイーズ」は、12 世紀の神学者アベラールと弟子のエロイーズの往復書簡「アベラールとエロイーズ」を踏まえた書簡体の小説である。アベラールは 20 歳年下のエロイーズの家庭教師として住み込み、熱愛する二人が密かに結婚して男児をもうけ、怒った親族によってアベラールは去勢され、エロイーズは女子修道院に閉じ込められるという悲恋の物語である。二人は男女の愛を神への愛へと昇華させるのだが、「新エロイーズ」のジュリーは克己心によって危機を回避する。

スイス詣での始まり　「新エロイーズ」の成功は《ルソーのスイス》へ大量の観光客をもたらした。ルソーの研究家ダニエル・モルネによれば（「自然への感傷：ルソーからベルナルダン・・サンピエールへ」などの著作がある）、「新エロイーズ」が刊行された 1761 年から革命勃発の 1789 年までの間に、48 種 130 版以上のスイスに関する書籍が刊行され、まさにスイス旅行はいっきに時代の流行となった。いとしのジュリーの故郷を求めてレマン湖のほとりに旅したフランス革命世代の著名人は枚挙にいとまがない。クラランはこの小説によって不滅の村となり、1781 年にメイユリー村を探してやってきたジョン・ムーアは「ジュリーとサン=プルーが過ごした場所が分かった！」と書く。かのゲーテもここを訪れて、悲恋の恋人たちを思って涙したという。「新エロイーズ」こそ、ヨーロッパ人の自然の見方を劇的に変え、田舎の住まいの魅力を彼らに知らせたのであった。アーサー・ヤング（1741~1820）は「フランス紀行」（1794）の中で、ルソーが青春を過ごしたヴァラン夫人のシャルメット山荘を訪ねた時のことを次のように書いている。少し長いが引用する。

> …目指す家はシャンベリーからおよそ 1 マイルの地点にあり、その街に通じる岩のごつごつした道と谷間の栗林に面している。家は小じんまりとしていて（中略）、ぜいたくさや仰々しさはみじんもない。灌木と花のために、庭園は手狭で簡素である。街の近くにあるというのに、ルソーが指摘するようにぐっと奥まった感じがして、景色は心地よい。それは私の関心を呼びさまさないわけにはいかなかった。私は大きな感動に打ち震えてそれを眺めた。木々が葉を落とした 12 月のもの悲しさの中でさえ、それは私の心を魅了した。私はあたりの丘をそぞろ歩いた。それは確かに、彼があんなにも気持ちよさそうに描いた散策の丘だった。私はヴァラン夫人の思い出を胸一杯に吸い込んでシャンベリーに帰った。（宮崎洋訳）

モルネは「そもそもルソー以前に、人は自然を知っていただろうか」と問いかる。1750 年を境にフランスでは、サン・ランベール、ルソー、重農主義者と言われる人たちが、文明を標榜する都市が田舎を収奪してきたと批判し、都市と田園の関係の見直しを主張しはじめた。とくにルソーは過去何世紀にもわたる都市と田舎の価値関係を逆転させようとした。田園は願望の対象に変わり、金持ち階級は好んでカントリー・ハウスを所有するようになった。

18 世紀半ばまで自然は軽視されてきた。古典主義時代の著作者で自然景観についてまともに言及した者は皆無であり、それは後世のヨーロッパ人から見ても驚くべきことだとい

う。批評家サント・ブーヴ（1804～69）は「スイスには美しい景観はあったが、それを描こうとする画家はルソー登場以前には一人もいなかった」と書いている。

「エミール」第 5 巻　ルソーは万巻の書を読む一方で、旅を通じて学ぶことで自己形成してきた。それゆえ彼は、他の課題に対するのと同じように、旅の教育効果についても直接本質に迫ろうとする。周知のとおり「エミール」は教育小説であり、エミールという名の少年が一人の家庭教師によって教育される状況と、理想の教育の理論と方法を論じている。年齢に応じて 5 部に分かれ、第 5 巻は最終章で、20 歳になったエミールの配偶者となるべき女性ソフィーに係わる話と、教育の仕上げとしての「旅行」が論じられる。最後の 3 分の 1 が『旅行について』にあてられている。要約すると、次に様なことを言っている。

世界の国々と人々を知ることは大切だが、書物を読んだことで知ったと思い込んではならない。知ろうと思えば自分の目で観察することが必要だ。しかし、知識を得るには諸国を駆け巡ってくるだけでは十分でなく、旅の仕方を知らなければならない。特定の目的をもって旅をする人間は、その目的に係わるもの以外は見ようとしない。学者も知識のために旅行するように見えて、やはり他者から旅費を得て利のために旅行している。ある国に自費で旅行する物好きがいても、研究のためではなく見せびらかしのためである……。このようにあれこれと旅行の態様を考察したうえで、下手な旅行をするからといって旅行が無益であるというわけではないが、「善い旅行の仕方」と「悪い旅行の仕方」があるのだとと切り込んでいく。理性によって行われるものはすべて理性の法則を持たねばならない。旅行もまたそれが教育の一部として取り上げられるのであれば、やはりその法則を持たねばならない。観察するためには観察の原則を設定しておかねばならない。羅列的に知識を集積するのではなく、本質を読み取り、知識を増やすよりも判断力を養うことが必要である。そして、ある国の本質なり風習を知るには、首都ではなく、動きが少なく外国人も少ない田舎へ行くことを勧めるなど正しい旅の仕方を伝授して、2 年間の教育旅行に送り出すのである。

これについては、サント・ブーヴが「月曜閑談」の中で取り上げ、「古代の哲学者のように徒歩で旅をしよう！」と呼びかけている。ルソーが「エミール第 5 巻」で提起した旅の仕方は、それ以前には無かった旅であり、アイザック・スターンの「センチメンタル・ジャーニー」やゲーテの「イタリア旅行」なども、こと旅の在り方へのインパクトではるかにルソーに及ばなかったし、そもそもゲーテのイタリア紀行はルソーのエミールを手本したものであった。

ところで自然 nature とは何かについて、ヨーロッパ人はどのように考えていたのか。19 世紀のロマン主義者たちは、「自然」とは人間が作ったものでない存在のすべてであるとともに、人間の内面にある本来の性質（本性）をも nature と呼んだが、18 世紀にはそのような自然観はまだまったくないか、あったとしてもかすかであった。少なくとも 18 世紀前半には、手つかずの野生の自然について関心を示した書物は皆無に近く、「風景」はあっても「自然」はなかったのである。とくに森や山は完全に無視されており、未だ恐怖の対象で

あり、風景を語るようになっても、人間の手の入らぬ野生の自然は関心の対象外であった。そして、18 世紀最後の四半世紀になって、ようやく恐怖の対象であった山岳への接近と挑戦が始まるのである。

登山への挑戦：ルソーからド・ソシュールへ

ルソーこそスイスの自然と山岳美をヨーロッパ人に知らせた最大の功労者であることについては、ほぼ異論なく、多くの文学者や史家が賛同している。中でもイギリスのジャーナリストで登山家でもあったレスリー・スティーブン（1832~1904）は、その作品「ヨーロッパの遊園地 Playground of Europe：スイス」の中で、ルソーは《アルプスのコロンブス》であり、《山岳という新しい信仰のルター》であるといってその先見性を称えている。実際には、ルソー以前にもスイスの自然主義者アルブレヒト・フォン・ハラー（1708～77）など、幾人かは神秘的な山岳美を作品に取り上げている。彼ら先駆者たちのメッセージ内容もルソーと同じであったが、「新エロイーズ」の影響が大きすぎ、他は忘れ去られたのであった。

ともあれ、自然観を決定的に変えたのはルソーであり、ルソーは象徴的な意味において自然の案内人であった。「新エロイーズ」によって山は発見され、その影響は全ヨーロッパに及び、少なくともその後の 1 世紀は山への情熱が燃え続け、多彩な人たちの注目を引き付けた。いわく、カント、ゲーテ、ナポレオン、バルザック、スタンダール、ラマルティーヌ、スタール夫人、フローベール、ジョルジュ・サンドといった人々である。

ルソーが愛した自然　ルソーといえどもハラ―たち先駆者から得たものも多いのだが、彼の圧倒的な表現力がものを言った。何といっても主人公ジュリーを活写した舞台はルソーが実際に歩きまわって熟知した場所であった。人々はジュリーの行動を追って《ルソーのスイス》を歩きまわり、陶酔、興奮、ため息、などなど、ロマンチックな詩的体験を味わったのであった。ルソーがとくにこだわったのは『湖』であった。ルソーは人々に湖の美を発見してもらいたかったのだといい、「新エロイーズ」の舞台を決めた理由について、次のように書いている。

> 登場人物を物語の展開に適切な環境に置くために、私は自分が旅した場所をあちこちと検討した。…甘美なたたずまいに魅惑されたボロネ諸島（マジョーレ湖の中の島々）にしようかとかなり迷ったが、あそこはわが登場人物にとっては装飾過多、人文的雰囲気が多すぎた。しかし、湖は欠かせない。結局わが魂が今もさまよい続けてやまない場所を選択した…。

ルソーが生きかつジュリーを育てた環境は、まもなく今日風にいえば「観光目的地」となった。しかし、ルソーが愛した自然は 18 世紀の人間の見る自然であり、過度に理想化され、野性味のほとんどない快適な自然であった。だから、ルソーと山が大嫌いだったシャトーブリアンは、「アルプスを〈発見〉したのはルソーではありえない」と言い、「告白」

の次のくだりを引用する。「どんなに美しくても、平原の地は私の眼には美しく見えない。私には急流が、岩壁が、樅の木が、…山々、…絶壁が傍になければならないのだ。」

要するに批判者は、ルソーの自然崇拝は信仰告白なのであって、個別具体的なものは何もなく、高山といってもレマン湖のそばの丘程度だというのである。アルピニストが体験する、高度が上がるにしたがって空気が薄くなるような自然の現実感はまるでない、というわけである。実際「新エロイーズ」に高山の描写は皆無であり、ルソー自身ヴァレ州であれサヴォアであれ、山に登った経験はない。1733 年にはモンブラン近くのクリューズに 1 か月滞在して毎日モンブランを見ているにもかかわらず、ひと言も言及していない。シンプロン峠やモンスニ峠を何度も通過しているのに、そこから見える山々について一行も書いていないのである。レマン湖畔から見えるサレーヴ山やダン・デュ・ミディも全く登場しない。さらにいえば、ルソーに影響されてルソー後に真のアルプスの美を描こうとした詩人も絵描きも旅行者もいなかった。ルソーは実物ではない文学的、芸術的アルプスを固定化し、ジュリーとサン=プルーの風景が、しばらくの間山岳アルプスの真の姿を隠してしまったのであった。

アルプス登山の始まり　ルソーは山や湖や氷河の美を称えはしたが、山頂登山にはまったく興味を示していない。ルソーの自然崇拝に触発されて登攀そのものに楽しみを見出したのはまずスイス人であり、ついでイギリス人であった。

キリスト教ヨーロッパには、中国や日本で高山を霊峰と呼び、深山幽谷に美や神性を見るメンタリティはなかった。それでも啓蒙の 18 世紀になると、先駆的な人たちはキリスト教の世界観はもはや問題解決の前提とはなり得ないことを理解し、自然界を支配する普遍的な法則性が人間存在をも等しく規定していると考えるようになった。ルソーの「自然に帰れ」という宣言はその象徴であり、新しい視野を切り開くものであった。野生の自然そのものが好奇心の対象、観光行動の対象として捉えられたとき、身近に存在していたのはアルプスであり、山と湖の国スイスであった。スイスはヨーロッパで初めての、そしてほとんど唯一の自然美を体現する観光地とみなされたのであった。

スイス観光のさらなる飛躍を促したのが登山であった。恐怖の対象でさえあった満年雪を頂く高山は、それまでは用もないのに入り込む場所ではなかった。それが新しく生まれた自然崇拝と文学上のロマンチシズムに刺激されて、人々が 4000 メートルを越すアルプス高峰の頂上を目指すようになったのである。

ド・ソシュールとモンブランの登頂　近代登山の開祖とされるのがルソーと同郷のジュネーブの植物学者オラース・ド・ソシュール（1740〜99）である。ド・ソシュールは、ジュネーブ郊外のサレーブ山やレマン湖畔から雪を頂くモンブラン（4,807m）を遠望して育った。20 歳になった年、シャモニーの谷越しにモンブランを正面に見るブレヴァン山に登り、自分もしくは自分の支援によって、人類が最高峰のモンブラン登頂を果たすことを科学の名において誓う。彼自身が様々な探検や調査を試みたほか、頂上への道を発見したものに

高額の賞金を提示もした。にもかかわらず、長らく挑戦する者は出ず、彼の誓いから 26 年経った 1786 年、ついにシャモニーのガブリエル・パッカール医師と案内人ジャック・バルマが登頂に成功し、翌年ド・ソシュール自身もバルマのガイドで登頂した。

ド・ソシュールによるモンブラン登頂の成功はヨーロッパ中の話題となり、この時からヨーロッパ・アルプスの高峰への登頂がブームとなった。スイスの山としては、1811 年にユングフラウ（4,158m）が登頂され、続いてモンテローザ山系のフィンシュテーラー（4,274m、1812 年）、ブライトホルン（4,171 年、1813 年）、ツームシュタイン・シュピッツエ（4,573 年、1820 年）など、4000 メートル級の山々が登頂されていく。

スポーツとしての登山　初期の登頂者はほとんどが地元のスイス人であり、しかも氷河や植生の調査などを目的とした科学者たちであった。スポーツないしレジャーを目的とする登山のきっかけとなったのは、鉄道が普及しはじめた 19 世紀中期、高山のない英国からやってきた法律家アルフレッド・ウィルズによるヴェッターホルンの登頂（3,708m、1845 年）であるとされている。この時から 1855 年モンテローザ（4,634m）、57 年メンヒ（4,099 年）、58 年アイガー（3,970 年）などが登頂され、1865 年に最後の難関マッターホルンに英国人の画家ウィンパーが登頂に成功して、アルプス登山の黄金時代は幕を下ろす。この間登頂された 140 座に上るアルプスの高峰のうち、約半分の 70 座が英国人登山家によるものであった。

避暑リゾートの誕生　スイスの山岳地方は、当然ながら冬は雪に埋もれてしまうから、夏が観光シーズンである。北ヨーロッパでも夏は暑い。危険と隣り合わせのスポーツ登山はともかく、登山の報道などに刺激されて、山と湖の国スイスには 19 世紀の初頭から次第に避暑客や観光客が現れるようになっていた。そのほんどが英国人で、彼らは早くからグランドツアーによってイタリアやフランスに旅行する習慣を身につけていたから、その延長線上に自然観光地スイスをも発見したのであった。

山岳地スイスに魅せられた高山のない国の英国人たちは、温泉地や海岸に次いで、スイスに理想的な避暑地を見出すことになった。後述の避寒地コートダジュールのように冬じゅう滞在するほど長期には及ばなかったから、自ら豪華な別荘を建てることはなく、最初から短期滞在も可能な高級ホテルを発展させることになった。

スイス最初の夏のリゾートは、正面にユングフラウ、アイガー、メンヒなどの山々を遠望するインターラーケンであった。英国人が人口 1000 人ほどの農漁村インターラーケンにやってきて、民家をひと夏借り上げて滞在を始めた。療養者ではなく健康者であったから、彼らはグリンデルワルトへ上がり、氷河をも探索した。やがてヨハンネス・ザイラーが初の旅客専用のペンションを建てて（1806 年）山岳観光が始まり、1859 年には大型ホテルのシュバイツァー・ホフ、1865 年には豪華なホテル・ヴィクトリアが建てられ、スイス山岳リゾートの先鞭をつけた。しかし、この建設年代で見るとおり、真の発展は鉄道誕生後であるから、その後のスイス観光については「近代ツーリズム」の中で扱うことにしよう。

避寒地コートダジュールの誕生

北ヨーロッパの冬は、日が短く、陽光が薄くて寒い。緯度を比べれば、ロンドンはカムチャッカ半島の南端に当たるし、パリですらサハリン島の中央部に位置する。それゆえ、昔から、移動の手段と滞在コストを負担できる有閑階級の人々、とくに病弱者は伝手を求めて冬の間暖かい南仏で過ごす人たちが少なくなかった。旅行記や文学作品には、17 世紀からイギリス人などが単発的にリヨンやモンペリエ、アヴィニョンやエクス・アン・プロヴァンスなどの南仏の都市で冬を過ごした様子が窺える。これらの成熟した南仏都市には単発的な避寒滞在客を受け入れるだけの施設・サービスに事欠かなかったからだが、18 世紀半ばにイギリス人の間に健康志向が高まる中、不健康な北ヨーロッパの冬を避けて温暖な地中海岸に転地療養を求める人たちが増えるのは自然の成り行きであった。

そうした需要を引き受けたのが今日コートダジュールと呼ばれる南仏の海岸地帯で、18 世紀の半ばまで寒村のつらなりに過ぎなかったこの地域が、イギリス人をはじめとする北ヨーロッパの富裕階級の避寒地として成長してくるのである。以下、マルク・ボアイエ Marc Boyer「避寒地コートダジュールの誕生」L'Invention de la Cote d'Azur によって、コートダジュールの誕生と発展を概観しよう。

誕生の背景　なぜコートダジュールだったのか。第一に、温泉地や海岸は夏場のリゾートであり、イギリス国内に冬季向けの避寒保養地を求めても無理で、暖かいところとなれば、地中海岸が理想的であった。コートダジュールは、アルプス山脈が直接地中海に落ち込む地形で、冷たい北風は後背地の 2,000m級のアルプス高地にさえぎられ、気候は温暖、植生は豊かで、北ヨーロッパから見ればエキゾチックなオレンジやレモン、オリーブや椰子などが生育した。多種類の花が咲き乱れ、冬も陽光豊かで健康的であり、病を癒す保養地としての適性をもっていた。それに、イタリアもコートダジュールも夏は暑過ぎて快適に過ごすことができず、冬こそ好ましいシーズンであった。

第二に、南仏プロヴァンス地方にはローマ時代の遺跡が多く、グランドツアーでイタリアへ行く際の主要経由地であった。イタリア体験の前座の役割をも担っていたため、以前からよく知られ、親しまれていた地域であった。このことは、コートダジュールのそれぞれのリゾートの始まりに、たまたま立ち寄った特定の著名人が大きく寄与していることからも窺える。

第三に、すでに保養とともに社交を楽しむ経験を有したイギリスの有閑階級にとってみれば、孤立せずにまとまって住めるのが好都合で、鄙びた土地柄で土地が安くかつ開発の余地が多いコートダジュールは適地であった。寒村かせいぜい小都市近郊で、地元住民の居住区から離れた地区に外国人用の高級避寒地区が形成しやすかったからである。

かくて、同じ目的を持つ保養者や避寒者たちが、同じ町や地域に寄り集まって過ごし、リゾート地が形成されていった。

保養地イエール　イエールはツーロンから東へ20㎞足らずの岬の付け根にあるコートダジュール最南端の町で、この地域への西からの入口であった。気候は温暖で、エキゾチックな植物を集めた高名な植物・果樹園があり、病弱の人の保養と健康回復の療養地として、避寒客を意識的に受け入れた最初の例であるとされてきた。ただし、ボアイエの研究によれば、その根拠とされた「1710 年にイエールで 20 家族ほどが避寒生活を送っていた」という証拠は発見できず、最古の記録は、アルトワ総督だったアンリ・デルブフ公（ヘルクラネウム発掘で知られるエルブフ公の父）が療養のためにイエールに別邸を設け、ここで亡くなったという事例であるという。イエールとニースは、英仏七年戦争が終わった 1763 年直後にほぼ同時に避寒地として発展を始めたとボアイエは考えている。

ともあれ、フランス革命（1789 年～）に先立つ 20 年間のイエールの避寒客には、英国貴族をはじめとするセレブの滞在が数多く記録されており、われわれ日本人には聞いてもわからないが、カーライル伯爵夫人だの、ノートル牧師だの、ジョージ 3 世の皇太子だのといった名前が並んでいる。フランスの著名人の名もあり、ミラボーとか、シャントレ男爵夫人といった名前がみられる。ほかに、中・東欧の王家・貴族の名前もあって、イエールが最初期の特権的避寒リゾートであったことを証明している。

ニースの利点　ニースは、のちにライバルとなるカンヌやモンテカルロに先駆けて避寒地に選ばれ、「コートダジュールの首都」とか「リビエラの女王」などと呼ばれる中核都市となったのだが、温暖な気候、景観の美しさ、植生の豊かさ等の自然条件では、格別ニースが他より優れていたわけではない。ボアイエは、イエールとニースに共通する自然環境のよさは「エデンの園」を類推させるエキゾチックな植物・果樹園の存在くらいで、それよりもむしろ、ニース発展の理由として政治的社会的条件を挙げている。まず、長期滞在する以上、様々なサービスを必要とするので、ある程度市街化した町の周辺が好都合であったこと、イタリア行きのコースのひとつとしてジェノアに渡る船の便があったこと、そして、ニースが当時サルディニア王家の領内にあり（フランスを出て最初のイタリアの町となる）、かつ、当時のニース公国が出入関税のないフリーポートであったこと、などがニースでの避寒滞在にプラスしたと考えている。

フランス革命前の 1784 年 11 月に避寒滞在者を数えた記録があり、これによると、英国人 50 家族と英国人以外の 18 家族を合わせて 68 家族を確認でき、家族と同伴使用人を合わせて、およそ 300 人が避寒生活をおくっていたと推計されている。

避寒生活と受け入れ体制　では、18 世紀後半にやってきた避寒客はどのように過ごし、受け入れ体制はどんな風であったのか。ボアイエは、避寒とは冬に快適な地を選んで家を借りるか別荘を所有し、必要なら縁者や召使・料理人を帯同し、冬季の数ヶ月を仮の住人として過ごす行動を指している。富裕な有閑階級が多い北ヨーロッパならではの需要であり、エキゾチックで暖かい地中海岸が彼等の移動可能な範囲に存在したという特殊な条件によって成立し得た慣習であった。

貴族階級を泊めるレベルのホテルはまだなかったし、あっても長期に滞在すると非常に高くつくので、家具付き貸家を借りるか別荘を所有して滞在するのが普通であった。イエールにしろニースにしろ、18 世紀の避寒客たちは旧市街に家を借りることは全く考えなかった。市街地は狭く、汚なく、ハエが飛び回り、下水が垂れ流しになっており、住民が夜 8 時に全員帰宅するまで、通りは安心して歩ける状態ではなかったという（英人スモレット、スイス人のスルザーほかの証言）。

そういうわけで、旧市街の外側に外国人避寒客のための立派な家具付き賃貸用住宅が多数建てられた。それも一方は海に面し、他方は田園風景が見えるように配慮されて。イエールでは、このような立派な家が郊外に沢山建てられた結果、英国人通り（Faubourg des Anglais）と呼ばれる街路ができた。借上げの契約は最低で月単位、通常はシーズンの通し（10 月から翌年の 5 月まで）、ときには通年の借上げさえあったという。

フランス革命とナポレオン戦争による中断を経て、カンヌ、モンテカルロ、マントン、アンティーブなどが開発され、1830 年代には自ら別荘を建てる富豪が増える一方、超デラックスなホテルも建てられるようになる。1860 年代にはこの地域にも鉄道が通じ、避寒リゾート「コートダジュール」が大発展していくのだが、個々のリゾートの発展史、避寒客の生活ぶり、受け入れ態勢の整備など、詳しくは後掲の『論集』に掲載の「避寒リゾート『コートダジュール』の誕生」を参照願いたい。